



六  
花

2

2022

りっかはいくかい

# 歡喜の空◎ 山田六甲

中身濃き賀状一通返したる  
元日もガツトリベロに餌運ぶ  
老いなどたとわけた脚め齧摘  
嬉しくも遅れて来る賀状かな  
さざ波に城垣毀れ寒に耐ふ  
あうちの実鳥来て歡喜の歌しばし  
寒風の杜に五十昭夫妻待つ  
寒く待つ稲美野果ての竹林に  
さざ波に毀れし顔で寒に耐ふ  
雪晴れて鳥たちの声杜包む  
目脚伸ぶ未完のままの大硯  
枯葉飛ぶ倒れし鳥居倒しあり  
鳥声に空は包まれ冬の杜

手水舎を立春の注連千切れ飛ぶ  
寒々と賽銭箱の左大臣  
寒風の掃き浄めたる土俵かな  
竹林の風打ちあへる寒戻  
玉垣の石の名の欠け寒尽きる  
ひよ鳥の食みこぼしたる樗の実  
寒禽と耳が会話をしてをりぬ  
一斉に鳥去りにけり寒の水  
空をゆく鳥の目ざとく実南天  
狛犬の紙垂千切れあり春隣  
境内の午後は寒風吹きつる  
寒林や竹の浮き根の青々と  
ひよどりの姫ひよよ姫よと日岡山

俳句界三句

オリオンに傾いてゐし我が故郷  
冬鷗猫の顔してうづくまる  
潮時の汐を見てゐる大晦日

鳥取や袋のまゝに梨ころげ 延川五十昭

とっとりやふくろのままになしころげ のぶかわ いそあき  
昨年秋つつじが丘句会で、鳥取の梨を兼題に出した。五十昭夫妻は現地へ行くだろうと思ったからだ。予想通り中御門出(てん)・冷泉花夫妻と吟行に出掛けたらしく、現地ではならの句を詠んできた。袋のままに梨が砂地に墜ちて、転がっていたのに気づいたのだ。さすが梨の本場鳥取だなあ高価な梨が袋をかぶったままに落ちていいる。ああ、もったいなくないと思いついた。さすが梨の本場鳥取だから傷ついてもいい、と言いつつながら梨刈りをしたのだろう。強く記憶に残る句。  
(六甲)

秋寒し寝具を繰りて夢の中 土井 清子

▽夢うつつの中で寒いから蒲団を手繰り寄せた。蒲団といえば冬の季語になるから寝具としたのだろう。二人なら同衾の者が、「なに?なに?」と目を醒ますにちがいない。人は寝ているうちに自らを守ろうとする防衛本能が働くのは不思議である。知らず知らずの無意識で人を傷つけ迷惑をかけているかも知れないと思うと、ゾッとする。  
(六甲)

秋の暮 ◎ 笹村 政子

わが影の田面にゆがむ秋の暮  
稲架けて人も夕日の中にある  
片足は神に捧げし案山子かな  
ひと枝の風に咲きたる返り花  
大仏師の庭に一輪返り花  
ひと揺れの葉陰に現れし椿の実  
滝つぼの音に散り敷く紅葉かな  
紅葉して水かげろふの立つ木膚  
暮れ残る海のきららや石路の花  
きのふより影深うして石路の花

▽この人の主題は「石路の花」だった。本人は気に入っている作品だからその句を主題にしたのだろうが、主宰は「田面にゆがむ」の場面が秋の暮らしいと思うのでその題を付けた。稲を刈り取るまで気づかなかった自分の影が田面に歪んでいることに気づいて「ああ、こんなにゆがんでいたのか」と感動したと見たい。技巧も大切だが、感動、感銘も大切。彼女は影を詠んだら天下一品、夢風撰候補。

▽仏師の庭に咲いた「帰り花」（主として桜だが、躑躅なども綺麗）は木屑ばかりの仏師の地味な庭に咲いた季節外れの美しい花に感銘。さぞ、この花は佛がもたらしたのだらうとも思えて感銘した様子が伝わってくる。帰り花は面影の帰って来る心情にも通っていよう、愁いの情も含めた季題である。

▽紅葉して水陽炎の立つ木肌の何か訴えてくる抒情がある。紅葉の名所は川や滝の近くにあるので水陽炎が立つのである。そこに目を向けたのが佳い。

▽石路の花は晩秋に明るく咲くので女性に人気が高い。空気も冷ややかになってくるので明るい色に心が和む。まだまだ挑戦する政子である。昨日と違う影に気づいた。秋深むと日の角度も急に変わる。それを捉えた力はまだまだ健全。

▽案山子の句。片足なのは片足を神に捧げたからだという。そういえば捧げるといふ文字は手偏である。

▽政子のすごいところは最後の最後まで句を突き詰めて、粘る根気であり、羨ましい。

▽政子もそろそろ後輩を育てる時期にきている。いつも文句のつけようのない佳作が多い。

無患子 ◎ 志方 章子

無患子を教へてくれし父在らず  
メロデイを奏でてをらむ吊し柿  
箱の外からも林檎の匂ひけり  
意味もなく見上げてをりぬ秋の空  
叫び声あげて葉虫を捕りにけり  
紅葉にはすこし早しと山の神  
抜け殻のやうな生家や捨案山子  
窓際に席を移せり水の秋  
実南天生りてゐるかと出てみたり  
秋蝶の影追ひゆかば駅舎かな

▽無患子（むくろじ）の句。昔は正月の羽根突きが子どもの楽しい遊びであった。追ひ羽根の黒い珠は無患子だよ、と教えてくれた父上はもう遠い世界に。私の幼い頃は「むく」と言っていたが、どんな木になるのかまったく知らなかった。万葉岬の寺で、ヤス子達に教えて貰ったが今もどれが無患子の木か、見分けられない。

▽叫び声の句。女性らしい特徴をよく捉えている。恐がりながらも残酷な行爲を堂々とする。蛇などはそれである。虫たちは「一番怖ろしいのは人間の女性だ、」と夢に出てきて泣いていた。そう思う。夢風撰候補。

▽紅葉にはの句。山に行くと「紅葉にはもう少し時がかかるよ」と山の神。

▽抜け殻の句。生家から皆巣立っていった、人生の思い出の欠片しか残っていない抜け殻、というのは当たっている。みなそういう思いで老いていくのだろう。捨てられた案山子はその象徴である。

▽窓際、実南天の句。気になる物を確かめて見たい人の心理が俳人らしい。もつとも俳人でなくてもそうだが、澄み始めた水や、今年は実が付いたかなあと確かめる心理はよくわかる。見たからと言ってどうなる物でもないが、見てみたのである。その心理は理解できる。

▽秋蝶の句。影を追って行ったと言うのがいい。蝶にはもう先がない。冬を過ごすのにどこへ行くのだろうと心配だったのだろう。蝶のあとを追いかけて行けば行く先は駅舎だった、と少し安堵しましたが、もしかしたら、夜汽車に乗ってどこかへ行くのかも。ロマンがある作品。



蒲の穂絮 ◎ 升田ヤス子

ふと飛べる蒲の穂絮や沼平ら  
爽籟や逆さ櫓の揺れあへる  
吟詠のひとり復習ひや荻の風  
ずつとここにぬしやう沼の飛来鴨  
案山子のみ納屋に残して田を売れる  
神留守の宮居や花屋盆栽屋  
神在の砂鉄あやなす大蛇川  
谿深き寺の流れやからすうり  
落羽松落葉は鴨の小櫛なる  
残る虫耳さとくゐる一人の夜

▽**残る出**の句。ご主人が外泊されたのであろう。ひとりポツネンといる夜は、ヒヨロヒヨロと気弱く鳴く虫が何か気になつて静かに聞き耳を立てる。お前も一人かと胸のうちで呟くのである。

▽**飛来してきた鴨**がたちまち一年中この沼にいたような顔をして泳いでいるよと思えるのだ。「久しぶりだね」ではなく「堂々としているね、楽しそうね」と心の中で問いかけている。

▽**吟詠**の句。ひとり復習は「さらい」と読む。おさらいは地味なことであるが基本のことであるので習い事では当然のこと。俳句もこういうお復習いが出来る人は伸びる。俳句の場合は古今の良い句をしっかりと学んでゆくのは大切なこと。学びはまねびであるから習って欲しい。

▽**案山子**の句。田んぼを売ったが、案山子は納屋に残したという。田んぼを手放したら案山子はもう要らないのに。という心情も。田を売る人はさぞご先祖様にお詫びしたことだろう。

▽**神留守**の句。各宮の神は出雲へ会議に出かけてその間、神社には神が留守である。その間の花屋や盆栽屋がどうなのかはよく事情が分からないので教えて欲しい。神留守の間、境内に花屋や盆栽屋が来て商売をしているのだろうか。

▽**神在**の句。神在というのは出雲へ神々が集まるので出雲は神在、地方は神の留守という。留守の間、商売の神様は境内に残っていないさつたのだろう。有難や有難や。もう一句、神在の川は神話に出てくる大蛇のような川で、古代は砂鉄の豊富な川でもあった。出雲が力を持っていたのは砂鉄による刀や槍の武器に使われたからでもある。

▽**落羽松**の句。落羽松はスギ科メタセコイア属の落葉高木で、1943年に中国大陸の奥地で発見された。その葉は櫛のような形状で、それからの連想で鴨の小櫛のようだと言ったのだろう。この人はまだまだ脳が若い。

## ひんやりと ◎ 善野 行

秋風やテラスにすするかけうどん  
ひと叢のひかる芒や岐れ道  
秋雨に溶け虹色の廃油かな  
芋掘りやシングルマザーの二子連れて  
ひんやりとしてきましたね赤松忌  
行く秋や日向を過ぐる鳥の影  
をちこちに草焼く煙神送  
幸せの柚子の香りにありと妻  
仏間越しより石路の花明りかな  
晴ればれと三代並ぶ七五三

▽亡き人への挨拶句、**赤松忌**への挨拶追悼句。何気な語細り掛けるように詠んで貰って赤松君もさぞ喜んでるだろう。亡くなった人はこのように思い出してもらえることが、大いに供養になる。さぞかし天上でにっこり微笑んでいることだろう。俳句をしていたことの喜びは死後も続く。夢風撰候補。

▽**秋風**の句。かけうどんとは具を入れないシンプルな出汁だけのうどん。秋風には相性のよい食べ物というか、うどん本来の旨みを味わうには素風ともいう秋風がもつとも相応しいような気もする。テラスは色もペンキも使わないで無垢の木材を使ってあることだろう。そのテラスで秋風に吹かれながら味わううどんは風雅な食べ物。

▽**芋掘り**をしているシングルマザーに注目した。二子は芋づるの連想で、たまたまそういう場面に遭遇したかもしれないが、作者の注意を引いたのは事実である。

▽**行く秋**の句。日向（ひなた）か（ひゅうが）かによって解釈がちがってくるが、この場合は日向日陰の句意で、日向に落ちた影の素早い影姿を詠んだものだろう。天候の移り変わりの激しい秋を素早く捉えて詠んだ。

▽**をちこちに**の句。一年の農作業も済んで、枯れ草や蔓、藁屑を集めて焼く。煙の中にチロリと炎が見えるのも何かほの温かい気持ち呼び込んでくれるような風景である。

▽**幸せの柚子**の句。こういう何気ない夫婦の会話の中にじみ出る会話こそが強く夫婦の思い出になって永遠に残るのである。夢風撰候補。

▽**石路の花**の句。僕は石路の花の句に佳い物がないことを知っている。それは石路の明るさに凭れた句が多いからだ。掲句は「仏間越し」にと視点を変えた処を評価するのだ。行さんには今月、六花集から句を取り上げて評してもらった。

## 秋茄子 ◎ 住田千代子

秋茄子けふも焼きみるひとり分  
蹲のわづかな水に小鳥来る  
澄む秋や杉の木立の昏がりに  
藤袴みやびに翅をたたむ蝶  
金色の波の醒めたる刈田かな  
新蕎麦や肌の温みの朱の湯桶  
四阿の高さに荻の騒ぎかな  
城垣の日の豊かなり赤のまま  
くつきりと櫓ふたつや水の秋  
右肩に竹の節見す案山子かな

▽秋茄子の句。茄子は秋のものなのに、どうしてわざわざ「秋」を冠するのか不思議に思つて調べたら「茄子は体を冷やすため、涼しくなってきた秋に茄子を食べると、大切な嫁の身体を冷やしてしまふ」という嫁の身体を気遣つたもの」という記述があった。歳時記で調べ直して見ると茄子は「夏の季語」であつた。大いに知識不足で反省。私の子どもの頃の記憶からみると、夏より秋の茄子の方が美味しくて、値段も下がつていたから、公務員の薄給なので母は安くなつたころに沢山買つて焼茄子を父や子に食べさせていたのだろう。私も大人になつたら思い切り食べてやろうと思つていたが大人になるとそんなに美味しく感じられなくなつた。炭火で焼かなくなつたからかも。

▽蹲の句。つくばいに小鳥がよく来て水を飲む。その光景を詠んだ。明石城の武蔵の庭に一辺一尺ほどのつくばいに自然に溜まつた水を小鳥が来て水をのんだり翅を濯いだりしている。また稲美野万葉の森にもほぼ同じ大きさの蹲（つくばい）があつて、小鳥がよく来る。それよりも掲句のような自然と溜まつたわずかな水を飲みにくる小鳥の方が愛くるしい。

▽澄む秋の句。杉山や木立の中は空気もフイトンチットで清浄。その森の中を流れる細い水の清らかさは感じられる。杉の暗がりを通れるその水に秋の澄んだ空気や音、杉葉の香りを染しんでいるのである。夢風撰候補。

▽藤袴の句。藤袴は名前からして雅び。秋の七草の一つで、『源氏物語』五十四帖の巻名のひとつ。人には名前や形状に溺れてはいけないと言いながら、私はこの名前に溺れてしまふ。掲句の蝶も雅な花に翅をたたんで休むというより溺れて居ると思う。その蝶は憐れな男の蝶なのである。

▽新蕎麦の句。蕎麦にそば湯はつきものだが、新そばの出る頃の肌寒さがそば湯をすすめるのにもってこいなのだ。塗り物の湯桶というのだろうか、そば湯を持って来てくれる。それを猪口に入れると人肌になるといふ気づきが佳い。この季節はとくに人肌恋しい頃でもある。夢風撰候補。

その他四阿・城垣の赤のまま・櫓二つ・案山子ともにすぐれているが紙数が足りない不悪。